

中原中也賞

と 30 冊 の 詩 集



中原中也賞は、日本の近代詩史に偉大な足跡を残した
山口市出身の詩人、中原中也の業績を顕彰することを目的として、
現代詩の新人賞として平成7年に創設されました。
新鮮な感覚を備えた優れた現代詩の詩集に贈るこの賞は、今回で30回を迎え、
新人詩人の登竜門として全国から注目を集める賞となりました。
これまでの受賞詩集と、その選考委員談話・選評を振り返ることと、
これまでの中原中也賞と、
現代詩の歩みを感じていただけますと幸いです。

第1回

夜の人工の木

霧工房

豊原 清明

豊原さんの詩は現代詩といわれる世界とは違った新鮮さがあり、未完成の原鉱石のような天才がうかがわれ、豊かな将来性が期待できる詩人であると感じました。



第2回

もしくは、リンドバークの畑

思潮社

長谷部 奈美江

目眩を覚えるようなイメージの意外な展開、読後のたのしさを評価して、『もしくは、リンドバークの畑』に中原中也賞を差し上げることにしました。



第3回

ブルックリン

青土社

宋敏 鎬

『ブルックリン』は、ニューヨークのブルックリンという地区をその生活のにおいを感じさせるような存在感を持って描き出した作品であり、ここには、わが国の、伝統的な叙情性とは無縁なわば、反叙情的、非叙情的な乾いた姿勢、日本語の表現への批評性、異国に滞在するマイノリティーの視点が認められ、こうした点を選考委員全員が、共通して高く評価した。



第4回

AFTER

思潮社

和合 亮一

『AFTER』は、現代の狂躁状況の中で、試行錯誤しながら、もがき、格闘し、反抒情的な新しいポエジーを、造型しようとしている姿勢が認められ、この姿勢を選考委員は評価した。この詩集は完成度が高いとはいえないけれども、現代に生きる青年の生理的な衝動をまざまざと感じさせるものがあり、この詩人の豊かな将来性を期待できると考える。



第5回

いまにもうるおっていく陣地

紫陽社

蜂飼 耳

この詩集は、原始的な生命感にあふれ、豊かなリズム感に富み、生理感覚を超えた身体的な動きののびやかさがあり、現代詩の時流から離れた場所で、きわめて個性的な世界をきりひらいている。20歳台の前半にこうした独自の世界を構築した、この詩人の才能に選考委員は注目し、その将来に期待して、この詩集が中原中也賞にふさわしいと決定したものである。





第6回

釣り上げては

思潮社

アーサー・ビナード

『釣り上げては』の作者は日本在住のアメリカ人であるが、上質な日本語で、現代詩に新風をもたらしたといってよい。この詩集に収められた作品は、手垢のついていない透明度の高い言葉で、日常をユーモアにとんだ角度からとらえている点に特色があり、読後感は愉しく爽やかである。選考委員一同は作者の将来に大いに期待している。

第7回

びるま

私家版

日和聡子

『びるま』に収められた詩には、びっくり箱を開けたような意表をつく、イメージの展開があり、ユーモアに富んでいる。このイメージ、ユーモアは、作者の日常の生活感の豊かさ、多様さから生まれたものであり、地方的でありながら地方性を越えている。この詩集の明るく独創的な詩境が選考委員に高く評価されたものである。



第8回

火よ!

書肆山田

神泉薫 (受賞時：中村恵美)

『火よ!』に収められた作品は、対象に作者が問いかけ、その問いからイメージを引き出し、次々にイメージを変化、展開させて、柔らかな構造体としての対象の本質を明らかにしている点に、作者の独自性があり、作品を読む愉しさを覚えさせる。こうした特徴を選考委員の全員が評価して、中原中也賞を贈るにふさわしいと評価された。

第9回

昼も夜も

ミッドナイト・プレス

久谷雉

『昼も夜も』の作家は19歳で、この詩集に収められた作品は作者の17、18歳頃のものであるが、思春期の情念、現代の若者の生理感覚、未知の現実の社会に対する予感が見事に表現されていることが魅力であった。他者と対峙する姿勢が認められないことに不満があったが、選考委員としては、作者の今後の成長に賭けることとしたものである。



第10回

オウバアキル

思潮社

三角みづ紀

『オウバアキル』は、一見したところでは日録風に身上雑事を日常的な言語で表現しているように見えるが、じつは日々の生活にひそむ不安、現代における若者の心的状況を、鋭くふかく凝視した上で、逆にそうした心情をかるやかに平静にうたいきったことに、作者の豊かな才能を評価したのである。

第11回

音速平和sonic peace

思潮社

水無田気流

単にうまさや完成度ではなく、荒々しいことば遣いながら、読者を動かす力をもち、これからの詩の可能性を開いている、水無田気流の詩集『音速平和』に、選考委員全員の評価が集まった。彼女の詩集は、個人や人間の輪郭が失われ、携帯や自動販売機やコンビニなどが日常生活の中に食い込んでいる現代、そして大量生産が大量廃棄にほかならないような現代の虚無感とたたかう詩のボディーを、ここにつくりだしているというのが、一致した評価だった。



第12回

みちのく鉄砲店

私家版

須藤洋平

須藤洋平の『みちのく鉄砲店』は、まったく異色なことばの世界であった。それは障害をもった身体が引き起こす孤独を引き受け、その病気の強い作用に負けない、人間としての感応力の強い詩の世界を展開している。表現としてのレベルも高く、単に私的な感慨の吐露ではなく、ことばのフィクションがよく計られた世界である。



第13回

グッドモーニング

思潮社

最果タヒ

選考会の評価はもっとも若い21歳、最果タヒのむしろナイーヴな表現に与えられた。それは彼女が重心を失って倒壊してゆく現代の世界を、全身的な感覚で触れているからである。その依り所のないイメージ、断片化し、脈絡を失った文脈、しかし、必死に考えようとしている彼女のことばの切実な不安に、わたしたち選考会は強い共感を覚えたのである。



第14回

先端で、さすわ さされるわ そらええわ

青土社

川上未映子

川上未映子の従来の詩の概念をはみだした、渦を巻いて展開する力動的な語り口に、高い評価が集まった。多くは女性の性的な身体やその部位のもつ痛みや快楽の感覚が、突発的な笑いを起す連想によって語られるが、それが常に観念によって媒介されているところに、詩の新しさが認められた。選考会は川上さんの出現によって、新しい詩の領域が切り拓かれたことに強い感銘を受けた。



第15回

適切な世界の適切ならざる私

思潮社

文月悠光

文月の受賞詩集は、14歳から17歳までに書かれた詩とは、とうてい思われぬ豊かな達成を示していた。若い敏感で痛々しい女性の身体感覚で世界を触っている。その詩のやわらかく伸びやかな姿が、現代詩という枠を超えた広い共感の場所を作りだしていた。そこに選考委員の一致した評価が集まった。





第16回

生首

毎日新聞社

辺見庸

辺見の詩集が、選考委員の支持を集めたのは、わたしたちが生きている世界のいまとここに、全存在をかけていることばの強度が並はずれていることだった。彼の詩には現代社会の腐敗し、機能不全に陥っている内臓が、驚掴みされている臨場感がある。これまで作家、ジャーナリスト、エッセイストとして実績のある人が、詩の世界に新人として飛び込んでこられた。その意味を、わたしたちは重く受けとめたい、ということでも、選考委員の気持ちは一致した。

第17回

ウイルスちゃん

思潮社

暁方ミセイ

受賞した暁方ミセイの詩集は、その新鮮な感覚、宇宙に広がっていく想像力のスイングの大きさ、語法の正確さなど、選考委員の一致した支持を集めた。巻頭の作品「世界葬」は、雪が降る光景を世界の終りと幻想しながら、そこにあふれる光の輝きの底で、あたたかく脈打つわたしの身体を感じている。この人の詩は、見えない隠画として、いつも死に滲透され、やわらかい無常観を感じながら、しかし、ことばは明るい光に満ち、春が希求されている。3. 11以後の世界でも、リアリティを主張できる詩集が、ここにあったことを喜ぶたい。



第18回

谷間の百合

書肆山田

細田傳造

問われたのは、ことばの持つ現代の意識であり、読者の心をとらえる生々しい魅力であり、初々しさである。その意味にかなった詩集が69歳の細田の詩集『谷間の百合』だったことは驚きであった。この詩集、一見、老人の日常がうたわれているように見えながら、深い生と死の亀裂が注視されていたり、韓国と日本の切断の意識が、ざらざらとしたつづてのようなことばの感覚でとらえられていたり、日常的な風景から非日常や深い思考にジャンプしたり、エロスの怖れにやわらかく触れられたり、年齢を超えて、若々しいことばの世界が創造されていた。

第19回

指差すことができない

アナグマ社

大崎清夏

大崎清夏の神話と寓話の構造を底に秘めた詩集『指差すことができない』が、これまでにない大きな構想力を持った詩集として評価された。島にいる「神」の顔が波や泡で出来ているというところから始まって、娘と森、砂丘になるらくだ、など作者が組み立てた幻想の物語は、ユーモアを持ちながら、言葉は限りなく開かれている。



第20回

グラフィティ

思潮社

岡本啓

岡本啓の『グラフィティ』はアメリカに住む青年が街の空気を吸い込みながら、そのなかで動詞の現在形を駆使して、自らのアクションで主体の世界をかたち作る。ナルシズムがないこと、明るさと線の太さ。世界に対する肯定性が貴重であった。ただし、作者にはまだ何も始まっていない。熱のある出来事を待ち受ける時期の作品だと見受けられる。いわば、野球を知らないでバットを振り回している素朴さのなかにある。しかし内閉的にならず、外へ出て行って言葉と対峙する、その姿勢を評価したい。

第21回

用意された食卓

私家版

カニエ・ナハ

カニエ・ナハの『用意された食卓』は、抽象的な戦争をテーマとして、それを弱者の位置から追い詰めている。また、その言葉の運動には、異化と同化の効果のバランスがいい。作者はもちろん戦争を知る世代ではないが、戦争のイメージに客観性を持たせると同時に、死者そのものになりきろうとする言葉の足どりと、切迫感がある。(中略)カニエ・ナハの作品がこの賞の最終候補に残るのは、今回で3度目である。そして毎回、発展を遂げて、今回の詩集が最もよく作者の力量を示した。その持続力に敬意を払いたい。



第22回

長崎まで

思潮社

野崎有以

最も白熱した議論の対象となったのは、野崎有以の『長崎まで』で、全篇行分けの散文詩であり、作者の語りた欲望の切なさが詩の内容の芯となっている。架空の町の架空の自伝とも読め、しかも演歌調の語りが戦略的。詩的にならないで詩の言葉になっている。意表を突いた詩集として、受賞作に決定した。



第23回

狸の匣

思潮社

マーサ・ナカムラ

マーサ・ナカムラ『狸の匣』は、圧倒的に詩を読むことの楽しさを教えてくれる。作者はどの時代にも潜り込むことができて、時間や空間の扱い方とその柔軟さ、そこに秘められたユーモアは天性のものと言える。昭和史を描き、家族を描き、それをクロスさせて一冊の詩集に閉じ込める力わざは、長編小説を読んだときのような魅力がある。詩を通してあらゆる時代に潜り込むことのできる面白さ。しかも普遍性がある。天才的な言葉の贅力である。



第24回

する、されるユートピア

私家版

井戸川射子

議論が最も活発になったのは、井戸川射子『する、されるユートピア』が話題になったときであった。母の死という一貫したテーマを持ちながら、収録されたどの作品においてもそれを表面に出していない。悲しみの抒情にもたれず、むしろ機嫌よく言葉を観察している力量は、素晴らしい。「手のひらは強く握っても／すき間は絶対なくならない」など、作者特有の鋭い言葉のセンスは新鮮。



第25回

美しいからだよ

思潮社

水沢なお

水沢なおの詩集は、かぎりなく小説に近い物語が描かれている。会話体で詩句が進み、そのなかで自分の薄い存在感を際立たせてくる。これは現在の日本の社会を描くのに、最も効果的な手法であっただろう。それと同時に、「私を戦わせて／私を戦わせて／私を戦わせて／私を戦わせて」と連呼する佳作「私を戦わせて」があり、薄い存在感がどのようにこの社会を生きていくのか、読者に勇気を与えてくれる作品もある。(中略)水沢なお『美しいからだよ』が持つ未完成性と、作者が未来をつつこうとしているその可能性に賭けることにした。





第26回

水際

七月堂

小島日和

小島日和『水際』は、のびやかでなめらかな言葉を駆使して、日常の現実の時間を手さぐりで描く。母親、父親、故郷など、作者が捨ててきた分厚い過去の歴史を再現しようとする試み。詩句が成立する背景の物語が大きく、ここにはやわらかな作者の声が明確にある。未知数だが、発展段階の個性が十分発揮されていることから、全員一致で、第26回中原中也賞受賞作品に決定した。

第27回

たましいの移動

七月堂

國松絵梨

國松詩集は現在の若者がこの世界を取り扱うとき、健康的で最も素直な報告とも言える作品。(中略)その点、國松詩集が持つ構成力は、読者を次第に、自分にも書ける、と思わせるような広がりがある。自らを途中経過とした自覚と今後の可能性に期待して、中原中也賞に決定した。



第28回

そだつのをやめる

thoasa

青柳菜摘

青柳菜摘詩集は、まったく新しい「時間」の取扱いかたをしている。セミや蝶などの虫の視点から生きものの成長(育ち方)を見る。同時に成長すると見えなくなる成長の過程を、また人間存在そのものを見直そうとしている。本文を読み進めるうちに、見つめている人間がどこにいるかわからなくなる、距離感の無くなる面白さがあって、詩集の中に閉じ込められるような、言葉の迷路の快感に誘われる。

第29回

渡す手

思潮社

佐藤文香

佐藤詩集は各篇にスタイルの一回性が感じられ、言葉のセンスの高さ、自在さが注目された。良くも悪くも、定型詩である俳句の作者として培われてきた言語感覚が現れている。「縦の感覚」「花筏」「行くということ」などの作品に作者の特徴が出ていて、言葉に関する引き出しを多く持っている書き手であると思われる。そこに、今後の展開も含めて期待が集まることとなった。



第30回

生きているものはいつも赤い

思潮社

高村而葉

高村詩集は、掴んだ地点や身動きできないその場所に錨をおろすようにして言葉を刻む。言葉をめぐるためらいや、どこでどう生きるのかといった疑念や自問が滲む。生きるうえでぶつかる壁や困難から目をそむけず、時間をかけて編まれたと思われるこの一冊には稀なる完成度の高さがある。

中原中也賞の30年

山口市湯田温泉の中原中也生家跡に、中原中也記念館が開館したのは一九九四年二月のことだった。その翌年、中原中也賞が創設され、九六年には中也の詩を研究し愛好する団体として「中原中也の会」が設立された。

中原中也賞の創設にあたって、既成の新人賞と違って特筆すべきは、受賞詩集に対して英訳詩集を贈呈することにしたことだった。新人とは何か。中原中也賞は詩人の原石を探索賞であること。完成された詩人ではなく、多少の瑕疵^{かきん}はあってもこれから始まる未知の可能性に懸けること、などを第一回選考委員会（荒川洋治、北川透、佐々木幹郎、佐藤泰正、中村稔、吉田熙生）で決定した。英訳詩集は今後、受賞者が英訳詩集とともに世界各地の詩の朗読会に参加できるように、また各国の詩人たちと交流しやすくなるためだった。

英訳詩集の贈呈は第10回で終わり、現在は高田博厚作の中原中也のブロンズ像に代わっている。中原中也賞はわずかに10年あまりで詩の新人賞として定着した。第1回以降のすべての受賞者がその後優れた詩人として活躍し続けたからである。そのことは30年目の現在まで続いている。受賞者が中原中也賞を育ててくれたのである。



運営委員

佐々木幹郎



選考委員

蜂飼耳

中原中也賞について思うとき、その背景にどれほど多くの人たちの願いや協力や工夫があるかを考えずにはいられません。賞の歩みは、受賞詩集や作者だけで形成されるものではなく、関わるすべての人たちがそこへ注いだ力や時間、そして何より詩に対する深い思いから成り立っています。その意味で、賞とは、ひとつの大切な場であると考えられます。

今日まで、地元の方々によっても、またそれ以外の方々によっても、育てていただき、持続するように見守っていただき、30回の節目を迎えることができました。改めて感謝いたします。現在では最も重要な詩の新人賞として位置付けられ、書き手たちから目標や憧れの的のように語られることも少なくありません。中原中也賞の詩人たちはそれぞれに、詩の香気を重んじる山口の面影を胸に抱いていることでしょう。詩の未来とともにある中原中也賞を、どのように描くことができるか、考えていきたいと思っています。

平成7年2月に創設いたしました中原中也賞は、移り行く時代の中で優れた現代詩を選出し続け、今回で30回を迎えました。中原中也賞の歩みは、この30年間の現代詩の歴史を象徴するものであると感じており、中原中也賞がこのように、新人詩人の登竜門として多くの皆様に認知され、高い注目を集める賞に育ちましたのは、市民の皆様、そして歴代の選考委員や受賞者の皆様をはじめ、これまで賞に関わってくださいました多くの皆様の御支援、御尽力の賜物でございます。深く感謝を申し上げます。

今後、中原中也賞の取組を通じて、本市出身の詩人・中原中也と中也の詩の魅力、そして現代詩の魅力を広く発信するとともに、詩人・中原中也を起点とした交流を創出し、中也のふるさとであり、また本市の個性を一層輝かせてまいりたいと考えておりますので、引き続き、お力添えを賜りますようよろしくお願い申し上げます。



山口市長

伊藤和貴